



書評

山本志乃著

『女の旅 - 幕末維新から明治期の 11 人』 (中公新書)

富澤 達三 (非文字資料研究センター 研究協力者)

本書は、幕末から明治期を生きた女性 11 人の「人生を賭けた」旅を、豊富な資料から具体的に紹介する。以下、章立てに沿って紹介したい。

「第 1 章 田上菊舎—二歳で未亡人となった美濃派俳人の全国漂泊」。田上菊舎 (1753-1826) は長州に生まれ、22 歳で夫と死別したのち、俳人となり 40 年間にわたる全国文学修行の旅を成し遂げた。「第 2 章 松尾多勢子—尊王思想に傾倒した豪農妻の京都出奔」。松尾多勢子 (1811-94) は信州伊奈の豪農の家に生まれ、50 代初めに平田派国学に心酔、京都にのぼり勤王の志士たちと交流し「勤王の女志士」と称された。

「第 3 章 檜崎 龍—龍馬妻の新婚旅行から、夫没後の上京苦譚」。檜崎龍 (1841-1906) は坂本龍馬の妻・おりょうである。龍馬とおりょうは日本初の新婚旅行を行ったことで有名だが、龍馬死後のおりょうは各地を転々とし、横須賀で再婚し終の住処を得た。「第 4 章 岸田俊子—民権派女弁士の全国遊説」。岸田俊子 (1861-1901) は京都に生まれ、18 歳で宮中文字御用掛職を経て結婚するも離婚、自由民権運動に身を投じ「初の女弁士」として人気を集め、大阪を拠点に各地を遊説する。民権運動の時代は去り、再婚した俊子は夫を支え、横浜での安定した暮らしを得るが、40 歳の若さで亡くなっている。

「第 5 章 津田梅子—六歳での米国留学、日本語忘却後の苦難の日々」。武士の娘であった津田梅子 (1864-1929) は、わずか 6 歳で初の官費留学生として米国に渡り、獲得した知識を女子教育に生かした立志伝中の女性である。立身出世が国家の利益に直結するという考えが、広く信じられていた時代ではあったが、梅子の旅は決して順風満帆なものではなかった。「第 6 章 花子—旅芸人が見た二〇世紀初めのヨーロッパ」。尾張の貧農に生まれた太田ひさ (1868-1945) は幼少期に売られ、芸者・旅芸人となり、花子の芸名でヨーロッパ興行で注目されて、彫刻家ロダンの作品「死の顔」のモデルとなる。離婚や興行の失敗など、激動の芸人人生の旅は成功し、花子はロダンの作品 2 点を携え帰国した。

「第 7 章 野中千代子—女性初の富士山“越冬”八二日の記録」。夫とともに厳寒の冬期富士山観測に挑んだ、野中千代子 (1871-1923) の冒険の旅である。「第 8 章 クーテンホーフ光子—欧州渡航と第二の故郷ボヘミアへの思い」。オーストリア・ハンガリー公使と国際結婚した青山光子 (1874-1941) は、外交官の妻として各国を旅行し、夫の帰国時には客船・鉄道と最先端の交通機関を使用している。彼女は欧州社交界で活躍するが、日本に帰ることはなかった。

「第 9 章 河原操子—蒙古王室、教育顧問のアジア紀行」。5 章の津田梅子は教育者として、女性たちを世に送り出したが、本章の河原操子 (1875-1945) も津田以上の過酷な旅ののち、内蒙古で女子教育の道を拓いた。「第 10 章 山野千枝子—ブロードウェーから東京へ、美容院開業」。山野千枝子 (1895-1970) は「写真婚」で日本人移民の男性と結婚し渡米、ニューヨークで美容技術を取得、東京丸の内美容院を開業する。「第 11 章 イザベラ・バード—明治初期、日本を駆け抜けた英国旅行作家」。明治初期、東北から北海道を探検したイザベラ・バード (1831-1904)。本書では彼女だけが、純粋な旅行目的で日本を訪れている。外国人女性にとって過酷であった日本旅行に果敢に挑み、彼女が体験した等身大の日本の姿は、『日本奥地紀行』としてまとめられ、不滅の輝きを放っている。

本書で紹介された 11 の旅は、日常生活を忘れる物見遊山=現在という「観光旅行」ではない。旅を終え、結果的に自らの糧となるが、獲得した知識や経験を何らかの形で若い世代や社会に還元しなければならない。明確な目的を持ち、故郷を遠く離れた地を目指し、目的を達成するか、何がしかの成果を得て帰還する旅。長い漂泊の暮らしの末、安住の地にたどり着き、そこで生涯を終える旅。長くつらい、文字通り命がけの女性の旅は、まだまだ無数にあったことだろう。本書の続編を期待したい。

